

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)		
<p>本校の教育テーマ「国際教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連づけて推進し、グローバルな視野と主体的に生きる力を有する生徒を育成する</p>		<p>■3つの教育テーマ「国際教育」「環境教育」「表現活動」の取組を実施することができた。環境委員による環境保全活動の取組と教職員によるKES認証の更新をともに継続することができた。 ■公開授業の回数を増やして授業改善に努めたが、家庭学習時間数の増加にはつながっていない。生徒の学習意欲向上につながる授業改善を一層進める必要がある。 ■大学合格状況は全般的にやや厳しい結果であった。入学時から学習習慣定着の指導に力を入れ、学力向上を図る必要がある。就職希望者は徐々に増加したが、最終的に100%の内定を得ることができた。 ■広報は、ツイッターやホームページを通して迅速に展開できた。しかしながら、生徒募集が厳しい現状を踏まえ、より魅力をアピールする必要がある。 ■部活動指導は、日々の指導に加え、部集を定期的に行い、北稜高校のリーダーとしての自覚を促す指導に努めた。ただ1年生女子の途中退部者が多く課題となっている。 ■鍵1グランプリにおいて3連覇を達成し、自転車盗難への防犯意識を高めることができたが、自転車の安全運転についてはさらに注意喚起を図る必要がある。</p>		<p>【目標】 3つの教育テーマ「国際教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連させた教育活動を充実させる。部活動の一層の充実を図ることで自主性と社会性、規範意識を養う。コミュニティスクールとして積極的に地域連携を行い、これまで以上に地域から愛され信頼される学校づくりを行う。</p> <p>【項目】 1 学習指導 (1)教員相互の授業参観を行うことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の研究と実践を行う。 (2)生徒の学習意欲を高め理解を深めさせるために、ICTを活用した授業の開発に取り組む。 2 進路指導と生徒指導 (1)希望進路の実現に向け、生徒の学力向上に努めるとともにキャリア教育を推進する。 (2)挨拶や身だしなみ、言葉遣い、スマートフォン使用ルールの指導に力を入れ規範意識を醸成する。 3 部活動指導 (1)部活動加入率の向上に努め、部活動の一層の活性化を図る。 (2)部活動員に学校生活のリーダーとしての自覚をさせ、あらゆる活動に意欲的に取り組ませる。 4 魅力ある学校づくりと情報発信 (1)生徒が協働して課題解決型学習に取り組み、自ら考えたことを校外に発信する機会を設ける。 (2)学校の日常の取組が保護者や地域によりよく分かるように、ホームページやツイッターをさらに充実させる。 5 地域との連携 (1)コミュニティスクールとして地域の信頼を一層得るための努力を続ける。 (2)近隣の大学や研究機関、小・中学校と学習や文化、スポーツの交流を行い連携の強化を図る。</p>		
評価領域	重点目標	具体的方策	評価基準	評価項目	総合	成果と課題
第1学年部	基本的な生活習慣を確立するとともに規範意識を高める	遅刻をなくし、欠席の場合は家庭連絡をしてもらえよう働きかける。挨拶・服装・髪型を整えるとともに、家庭・学校・社会のルールを守る規範意識を高められるようにする。部活動に積極的に参加させ、学校に軸足を置いた生活を送らせる。	1限目の遅刻・欠課者数を少なくできたか。規律等校内での指導を受ける者の数を少なくできたか。部活動加入率と定着率を前年度以上にできたか。	B	B	感染症不安の理由での欠席も目立ったが、連絡なしの欠席は少なかった。朝の校門での始業時間遅刻者は平均して2日に1人程度、通学自転車の無施錠など駐輪違反の件数は少なかった。ルールを守って学校生活を送らせることは概ねできた。部活動定着率は大幅に前年度を下回り、部活動所属生徒は7割を下回った。
	学習習慣の定着を図り、学力向上に努める。	目標に応じた学力を身につけさせ、希望進路がかなえられるよう学習状況の把握に努め、学習習慣の確立につなげられるようにする。	個人面談等で生徒の状況を把握できたか。教科との連携で学習状況が把握できたか。定期的な学習時間調査を実施し、調査ごとに学習時間を増やせたか。	A	A	定期考査前に学習への働きかけと考査後の振り返りを行い、学習習慣の確立に努めることができた。全クラスで学習時間調査を実施することはできなかったが、クラッシュを活用して学習時間向上に努めるように取り組んだ。
第2学年部	主体性を育む	・挨拶の応答の際、一声かける行動を教員が積極的に行うことで、生徒の主体的な挨拶や声かけ行動を促す。	・挨拶に合わせて一声かける行動を、教員から積極的に行うことができたか。また生徒の反応を通して、発信力の向上を感じることができたか。	B	B	・学年会や日常会話を通じて生徒の状況を共有し、ホームルームを超えて個別に声を掛け合える環境を整えた。挨拶は多くの生徒からも発信されており、次年度においても進路指導をふまえて継続的に声をかけることで次の段階に移行したい。
	家庭学習の習慣	・生徒自身が生活習慣に合った時間の使い方を模索し、それを身に付けて自立していきよう指導する。 ・生徒自身が学習課題に気づき、その課題に主体的に取り組む指導を定期的に行う。	・生活習慣を振り返ることで、生徒が自らを客観的な視点で捉えようとしたか。 ・生徒が主体的に学習課題に取り組む時間を確保したり、その意識を向上させたりできるような面談や声かけを定期的に行えたか。	B	B	・休校明けの生活や各考査前後に学習習慣や計画、また考査結果の振り返りをシートに継続して記入することで、自らを客観的に捉えて次の目標に向かえるよう指導した。 ・生徒の困り感など、各担任と本人の面談だけでなく保護者への電話連絡や必要に応じて二者、三者面談、また学年部長を通して連携して解決するよう取り組んだ。
第3学年部	社会で生かせる基本的態度の確立	挨拶・身だしなみ・言葉遣い・聴く姿勢等社会・家庭・学校のルールを守る。常に身辺の整理・整頓を行い、時間を守る。	2回以上の生徒指導回数(遅刻指導を含む)をなくす。書類(課題等含む)期限内提出95%	B	B	遅刻指導については家庭連絡・個別・学年指導により一定増加をくい止められたが、欠席が増えた。書類提出については提出はするが、期限内提出は厳しかった。
	個々の進路実現に向けた効率的学習時間の確保	進路を含めた面談をきめ細やかに行う。日々の家庭学習時間を記録させ、学習時間の充実を図る。	個人面談ひとり2回以上の実施 週一回家庭学習時間を記録させ、点検する。	B	B	個人面談は一人2回以上の実施を行い、丁寧に卒業後の進路指導等を行うことができた。週一回の家庭学習時間記録と点検については、こまめに実施することは難しかった。
国語科	生徒の学習意欲を高め、しっかりと家庭学習を確立させる。	・予習や復習のきめ細かな指示と確認、小テストの定期的実施を行う。 ・定期考査などで自己を振り返る機会をつくり、自分の課題を見つけて自ら解決しようという意欲を持たせるような指導を工夫する。 ・定番教材の指導方法を見直し、生徒が主体的に参加できる授業形態をさらに工夫する。	・家庭学習時間を、国語が週3時間以上になるようにする。 ・学習内容を相互で確認し合い、生徒自ら予習の意欲につながる指導ができたか。	B	B	・定期考査ごとの学習時間調査が行われなかったこともあり、今年度については調査ができていないが、家庭学習を定期的にやり取りしました。 ・各学年において、小テストの計画的な実施はできていた。 ・コロナ禍の中では、生徒が主体的に参加できる対話的な授業づくりは積極的に展開できていないが、予習の確認や内容の定着などの場面で工夫をして取り組んだ。 ・とくに課題を抱える生徒に対しては個別指導を行うなど、粘り強い指導を心がけた。
	多様なそして多数の語彙を習得させ、豊かな世界観を育成させる。	・文法的体系だけでなく、類義語や対義語などの横の広がり、語源などの縦のつながりなど、いわば言葉のネットワークを意識させる。 ・ブックレビューの作成など、読書を喚起させる工夫を各小科目担当で協議し実施する。	・読書指導に特化した授業を1・2年生でそれぞれ2時間以上実施する。 ・文章表現の基礎的な力を養い、他者と協働しながら探究活動準備ができたか。	A	A	・北稜探究Ⅰと北稜エッセイⅡにおいて、読書指導や文章表現の基礎力養成に取り組んだ。 ・北稜探究Ⅰでは、小論文模試に向けてのガイダンスや指導を、北稜エッセイⅡでは、志望理由書を書くために事前指導を段階を踏んで丁寧に行った。 ・今年度、現時点でコロナ禍で他者と協働する場面はあまり作れなかったが、一つ一つの取り組みについて振り返りを丁寧にするなど主体的な取り組みを促すことはできた。
地歴・公民科	各科目を通じて「国際教育」「環境教育」「主権者教育」の視点を踏まえた授業展開を心掛ける。	グローバルな地理的・歴史的認識の下、同時代の世界、周辺諸国の動向に注目しながらの授業展開を工夫するとともに、地域社会との関わりをなかめ、主権者意識を育みSDGsの観点で事象を把握できるように留意する。	絶えず現代世界の動向を見据えながら授業展開できたか。俯瞰的な視点で事象の因果関係を説明できたか。探究学習やレポート作成などを通じて主権者意識を育むことができたか。事象をSDGsの観点で理解を深めることができたか。	A	A	エッセイ総合社会でSDGsの観点でグループ学習や発表、フィールドワーク、外部講師を招いた講座授業などに取り組んだ。対外的評価の得られる税の作文、JICAエッセイコンテスト、STEAM JAPAN AWARD等に応募し、全国レベルの受賞をうながした。
	生徒の実態に合わせた「わかりやすい授業」の教材開発に取り組む。	すべての科目において、学習内容の精選を行うとともに、生徒の視点に合わせた教材開発(視聴覚教材 ICT)を心がける。その際、「総合的な探究の時間」とリンクする教材開発にも留意する。	教授内容の精選ができたか。新資料や視聴覚教材をタイムリーに提供し、ICTを効果的に利用しながら、レポート、討論など諸場面において活用できたか。	A	A	各科目においてコロナ禍の休校中に、ICT機器も活用しながら、問題演習やレポート作成に取り組んだ。休校後は校内ICT整備に伴い、機器活用を伴った授業を試みた。
数学科	生徒の希望進路実現に向けて、低学年で基礎・基本を固める。	・効果的な課題を教科会で検討し、課題を通して家庭学習を充実させ、小テスト等で知識の定着を確認する。 ・必要な生徒に対して基礎補充を定期的に行う。	・生徒が提出物や小テストに取り組んだか。	A	A	教科の取り組みとして、1年スタンダードコースの成績不振者に対して、毎週1回の補充や夏・冬休み中に補充を行った。また1年アドバンスコースの学習理解が遅れている生徒に対しても補充を行った。
	大学入試に対応できる力を育てる。	・思考力・表現力・判断力を伸ばす授業展開を教科会で検討し、実践する。 ・進路補習や土曜講座等で入試に対応した問題を取り組み、論理的に思考する力を養う。	・各学年で実施される進研模試等の成績を伸ばすことができたか。	B	B	研究授業を通じて、主体的対話的で深い学びの授業実践について協議した。授業改善のための研究協議の回数をもっと増やすことはできる。また、土曜講座や進路補習、朝学習を通して、大学入試に向けた力を育てた。
理科	自然現象への興味・関心を持たせ、授業への集中力を高める。	身近な自然現象を授業で積極的に扱ったり、演習実験、模型、ICT機器を活用したりして、興味・関心を持たせ授業に集中させる授業改善を行う。	自然現象に興味・関心をもてるように授業改善ができたか。	B	B	自然現象の科学的な説明がイメージしやすいように演習実験、模型、ICT機器を活用し、学習内容を理解し興味・関心をもてるよう授業改善を行った。感染症の影響で前半は実験観察が例年よりも実施できなかったが、後半には感染症対策を十分行った上で授業に実験観察を取り入れたり、身近な現象の解説をすることができた。
	日常の学習習慣を確立させる。	年間を通じて日々の授業の重要性を強調する。明確で細かな指示を心がけ、生徒がスムーズに学習に取り組めるようにする。学習習慣の確立のため、課題プリント、実験・実習レポート等を定期的に提出させてチェックし、小テストも行う。	年間を通じて授業を含めた日々の学習の大切さを強調し、日常の学習習慣を確立させることができたか。	B	B	新型コロナウイルス感染症対策の休校による、学習進度の遅れの影響をできるだけ小さくするために、学習内容の精選を行った。休校明けにスムーズに学習を開始できるように、休校中の課題を設定した。日々の学習習慣が確立するよう定期的に課題の設定や小テストを行いきめ細かく指導した。課題提出や小テストへの取組が不十分な生徒もおり、引き続き日々の取組の大切さを強調していきたい。
保健体育科	主体的に学ぶ授業の充実をはかり、生徒の学習意欲を高める	生徒がより主体的に学べるよう、講座や生徒の状況に応じた各種目の目標設定を行い、達成感や充実感の高い授業にする。ICT機器等を使用し、仲間と相互に協力して課題を見つけたりアドバイスをしたりできるように指導する。生徒主体の授業計画と授業実施を行い、生涯にわたってスポーツに取り組む姿勢と考える力の伸長を図る。	目標設定は、生徒が達成感や充実感を持ち、主体的に活動できてるものであったか。 ICT機器等の使用によって、自己の動作や仲間の動作を客観的に捉え、課題を見つけることができたか。 授業計画書の作成を提出期限内に行い、その授業実施にむけて担当教員との確認作業を念入りに行ったか。	B	B	難度に応じた段階的な目標を設定したことで、目標達成に向けて主体的に取り組む様子が見られた。 表現活動の授業においてiPad等で撮影その動画を見て、課題を発見し克服しようとした。今後、学校保有のICT機器の充実が課題となる。 ほとんどの生徒が計画書の提出を含め期限を意識した行動ができるよう指導したことで、より主体的な授業を展開しようとする工夫が見られた。仲間との協働を通じて、個々がさらに責任を持った言動ができるような声かけを継続する。
	安全な授業進行の徹底	担当教員は事前に施設、設備、備品の安全点検を行う。また、授業内での怪我を防止するために、身だしなみの確認を徹底する。	授業前に担当者は毎時間、安全点検と生徒の健康観察、身だしなみチェックを行ったか。	B	B	健康確認及び身だしなみチェックを毎時間必ず行った。 施設の老朽化等による破損を確認しその対応を早期に実施できた。老朽化が進んでいる箇所や、雨天時の活動場所の拡充を図り、よりよい施設の充実を望む。
芸術科	芸術の幅広い活動を通して、各科目における見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを旨とする。	生徒のレポートやアンケートを用いて、目標の設定と振り返りをさせることにより、芸術における諸能力が高まったかどうかを評価させる。 主体的・対話的で深い学びの実現に向け、ICTやアクティブラーニングを活用した授業を展開する。	芸術の感性が高まり、諸能力が伸びたと感じた生徒が80%を超えるかどうか。 ICTやアクティブラーニングをとり入れた授業の開発の取り組みと、その積極的な展開ができたかどうか。	A	B	芸術科の授業評価アンケートより、授業が技能を高めるのに役立っていると感じる生徒は34.0/4と高評価で、昨年より0.04ポイント伸びていることから、1年を通して様々な課題を行うことで諸能力が伸びたと感じる生徒がいたと思われる。また、小教科ごとのアンケートでは、諸能力が伸びたと回答した生徒は91%となった。課題ごとに満足度の違いがあり、今後も引き続き比較検討していきたい。 各科目の授業でICTやアクティブラーニングを取り入れ、新たな展開を試みることで授業もあつた。今後、さらに発展的に工夫していきたい。
	「国際教育」の中心的な教科としての自覚を持ち、生徒の学習意欲を高め学力を向上させる。	家庭学習を習慣づける。その一助として、各学年とも小テストを毎週実施したり、予習復習を詳しく指示し、1年生から必ず提出物を出すような習慣をつけさせて、学年が進む毎に自主的に取り組めるようにする。 英語検定取得者を増やす。特に、2年終了時までで、文理コースの生徒は準2級、英語コースの生徒は2級取得を目指すよう指導を徹底する。 GTECについては、意欲・目標を持って取り組み、スコアアップを目指す。2年時には検定版を実施して、オフショアスコアを取得させる。 英語コースについては、「アクティブイングリッシュ」「北稜エッセイ」の授業を通して、GTECや英語検定の問題演習も行う。	各学年での小テストの実施・活用・評価への反映ができたか。 1年生からの必修提出物の指導を徹底できたか。2・3年と年次進行で自主的に取り組む姿勢を継続させられたか。特に、1年生に関しては、必修提出物の提出率100%を目指す。 英語検定取得者が各学年増加したか。 特に、2年終了時までで、文理コースの準2級取得者50%、英語コースの準2級取得者70%、2級取得者30%が達成できたか。 GTECについては、各学年とも1年後のコース平均を、総合コース30点アップ、文理英語コース60点アップを目指す。	A	B	小テストの実施及び予習復習の点検については実施している。1年生の提出物指導は遅れる生徒もいるが、ほぼ100%が達成できている。2・3年生も継続指導により、以前よりも提出物などに取り組む姿勢は継続できているが、特定の生徒が提出できない現状も見受けられる。全学年を通じて提出物について意識の低い生徒が多いので、今後も継続して指導していく必要がある。 コロナの関係で、学校実施の英検は秋に1回のみとなった。2年終了時までの準2級取得者は文理コースが15%弱、英語コースは50%弱で、英語コースの2級以上の取得者は10%弱であった。また、GTECについては、2年生では、総合コースが9点アップ、文理コースが90点アップ、英語コースが106点アップとなった。3年生は受験していない。一部目標達成した部分もあるが、達成できなかった部分においては、今後も継続して英語力アップを目指していきたい。
家庭科	1人の生活者として自立させる	食生活や、消費者問題を中心に自立して生活することを考える。	栄養バランスを考えた献立で作成ができるか。成人年齢が下がる中、消費者としての意識が確立できているか。	B	B	フードデザインで1学期は献立で作成を中心に取り組み、2学期からはコロナ禍に配慮した調理実習も始められた。家庭基礎の消費生活においては、まだ現実と生徒の意識の溝を埋められなかった。
	共生について考えさせる	乳幼児、高齢者、障がい者との共生について視聴覚教材などを通し主体的・対話的で深い学びにつなげていけるようにする。	各単元の終わりに、レポート作成やグループ学習のまとめをすることにより各課題に対してどのように考えるかを確認する。	C	C	コロナ禍により、グループ学習は実施できなかった。子どもの発達と保育で出生前診断を通して障がい者との共生については個人で考えさせた。高齢者については家庭基礎で視聴覚教材を用い、年金生活や孤独について学習し一定の理解を得た。
情報科	教科書だけの勉強で済まず、実生活に目を向ける授業展開を心がける。	基本的なPC利用・キーボード利用の修得を目指す。実社会で起こっている事例を例として取り上げ、身近なこととしてとらえさせる。	PCを使って創造的な活動ができること。 情報の受信者・発信者として、リテラシーの重要性を自覚すること。	B	B	年間を通して、「情報社会とモラル」「コンピュータとデジタル情報」を主に指導した。本年度は例年に比べ実授業数が少なかったため、「情報通信ネットワーク」と「問題解決とネットワーク」は基礎的な部分を指導した。一方、キーボードの利用についてははずいぶん達した。 今後、望ましいリテラシーを持ちながら創造的な発信をも行えることを期待している。